



甲骨綴合集

石璋如署端



蔡哲茂著

Catalogue of Oracle Bone Rejoinings

Tsai Che-mao



Taipei, Taiwan

1999

國家圖書館出版品預行編目資料

甲骨綴合集 / 蔡哲茂著. -- 初版. -- 臺北市
：蔡哲茂發行：樂學總經銷，1999[民88]
面：公分
參考書目：面
ISBN 957-97394-2-0（精裝）

1. 甲骨 - 文字 - 研究與考訂

792.7

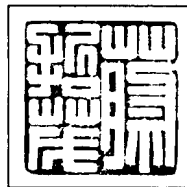
88011133

甲骨綴合集

Catalogue of Oracle Bone Rejoinings

中央研究院歷史語言研究所外版書

限印1000本第00509號



發行人：蔡哲茂

作者：蔡哲茂

總經銷：樂學書局有限公司

台北市金山南路二段138號10樓之1

電話：(02)2321-9033

傳真：(02)2356-8068

印製：文淵閣文化事業有限公司

電話：(02)2301-7980

初版：1999年9月

定價：新臺幣7,000元

本書所有文字、圖片著作權為作者所有，
翻印、盜印必究。

2000 1 20

考古书店

¥2000.00

謹以此書紀念

先師 金祥恆先生

序

裘錫圭

蒙蔡哲茂先生將《甲骨綴合集》稿本見示，得快先睹，十分高興。甲骨綴合對甲骨文研究的重要性，蔡先生的自序已經講得很清楚，在此不必重複，下面對他的書作一簡單的介紹。

蔡先生在他長期從事的甲骨文研究工作中，一向很注意甲骨斷片的綴合，已經發表了不少這方面的文章，殷墟出土的很多破碎甲骨經他的手而得以「重圓」。甲骨學界對他的綴合成果極為重視。但是他的有關文章很難找全，使用起來頗感不便。現在蔡先生把他在甲骨綴合方面的全部成果編為一書出版，一定會受到甲骨學界的熱烈歡迎。

蔡先生的綴合工作，主要是以《甲骨文合集》所收的甲骨為對象的。《合集》在編輯過程中做了大量綴合工作，成績巨大。但在吸收前人綴合成果方面尚有遺漏，其他可綴而未綴的情況當然更無法完全避免。《合集》出版後，除了蔡先生，還有不少學者做過綴合的工作。為了使讀者在使用《合集》時能全面吸收甲骨綴合的已有成果，蔡先生編了《〈甲骨文合集〉綴合號碼表》附於書後。此表以《甲骨文合集》的片號為綱，凡各家（包括蔡先生自己）已將其與他片綴合之片全部列入表內，並註明其綴合情況。一查此表，就可以知道《合集》的某片能否與他片綴合，是誰綴合的，可與之綴合的是哪一片或哪些片。此表之後，還有《〈甲骨文合集〉未收綴合號碼》和《小屯南地甲骨綴合號碼》、《英國所藏甲骨集綴合號碼》三表，使讀者對《合集》之外甲骨的綴合情況也能一目瞭然。所以，《甲骨綴合集》不但對蔡先生自己的甲骨綴合成果來說是一部集大成的著作，就是對迄今為止整個學術界的

甲骨綴合成果來說也是一部集大成的著作。

蔡先生在綴合工作中還使用了一些尚未發表的甲骨資料。例如：五十八組下段取自東京大學東洋文化研究所所藏《山本竟山舊藏甲金文原拓帖》。一〇〇組上段取自歷史語言研究所所藏《施美士藏甲骨文》。三三〇組右側一塊卜甲，已用史語所所藏《善齋藏契》中的拓本，取代了《合集》19407號拓本，後者，拓本所據卜甲已殘去四字。

蔡先生還對所綴合的甲骨作了釋文和考釋，不但介紹了各家的有關意見，還有不少自己的創見，有很高的參考價值。此書出版以後，必將成為甲骨文研究者所必備的重要參考書。

一九九八年七月

Preface

The title of this book is short and simple and its English translation could well be entitled “Catalogue of Oracle Bone Rejoinings”. This simplicity is clearly intentional and it would not be an overstatement to simply call this publication “TheCatalogue of Rejoinings”. Coming after the publication of the 13 volumes of the “Chia-ku-wen he-chi,” (hereafter “He-chi”), it is definitely the most important collection of new rejoinings.

雷

The author, a research fellow at the prestigious Academia Sinica (Nan-kang, Taipei), has long had a strong interest in the rejoining of separate fragments of oracle bones. His first contribution was published as early as 1977, but this was only the beginning as we see from the list of his articles on the subject at the end of the present catalogue, a compilation of some 32 titles. Now all these rejoinings are collected together and appear in the present work for the benefit of scholars working in the field.

序

Mostly the author uses the material collected in the “He-chi,” but also includes the contents of the main catalogues published later on, namely the “Hsiao-t’un nan-ti chia-ku” and the “Ying-kuo so-ts’ang chia-ku-lu”. In addition to this his work includes several new catalogues, especially those which have been published in Japan. Besides this, with dedication and untiring zeal, the author has taken the pains to work through all the ancient catalogues, looking for possible new rejoinings.

The author does not concern himself with dating each of the inscriptions, but rather has a table indicating to which of the “He-chi” they belong. In this way he indicates the period to which, according to the “He-chi,” they belong. Another point worthy of mention, and something no one has ever done before, is the way he indicates the numbers of the fragments having the same inscription. For the author this was a very important tool for the treatment of the oracle bone inscription material, and has provided an important key to finding new rejoinings.

In his catalogue the author has reproduced rubbings of the highest quality available, the printing of which is simply excellent, making them a pleasure to view. In front of the rubbings, the author has added his own hand-made copies, obviously made with the utmost care. In certain cases, when the best rubbings are not perfectly clear, these hand copies are invaluable.

In the second part of his volume, the author adds his own short and straightforward commentary on the inscriptions. Some of the best scholars are quoted and their opinions discussed. When the interpretations still remain in doubt, this is stated clearly. It goes without saying that the author is indeed a very learned person and his short and unequivocal commentaries will be no small contribution for a better understanding of oracle bone inscriptions.

The author adds several tables at the end of the volume. One of them is the list of inscriptions, nearly one thousand of them, that appear twice in "He-chi". Most of the time this happens when a rubbing, included in a rejoining, is reproduced separately a second time.

Another table provides a list of more than twelve hundred inscriptions called "t'ung-wen" in Chinese. The text is the same but is inscribed on different fragments. For those who pay attention to the original graphs and their disposition on the inscription it will greatly facilitate the use of "He-chi".

But most important for scholars is the general list of all the rejoinings effected to date but not included in "He-chi". It includes the 360 new rejoinings made by the author together with all those previously made, but unfortunately not included in the "He-chi". There are nearly 700 of these missed rejoinings. This general list is made according to the 13 volumes of the "He-chi". As a result the present catalogue has become an indispensable instrument for anyone using the "He-chi".

As indicated by the tables at the end of this catalogue, the "He-chi" was in great need of such a complementary work. However, by collecting and classifying so many rubbings and hand copies, the "He-chi" made the work of Ts'ai Che-mao much easier. From now on these two catalogues have to be used together, and for the rejoinings the present book will remain "The Catalogue".

Jean Lefeuve
Ricci Institute
Taipei, Taiwan

序

松丸道雄

いわゆる「甲骨学」自体が、既に諸学のうちにあつて、特異な分野の学問であるが、そのうちでも「甲骨綴合」は更に極めて特異な一分科である、と言えよう。しかし、甲骨研究における綴合の重要性は、その研究の最も基礎を構成するものとして、極めて重要な意義を担うものである。

ところで、私見では、一言を以て「甲骨綴合」と謂つても、その内容・方法において大きく二分類すべきものであらうと考える。

その一は、ある限定された範囲の甲骨資料のうちで、それがどのように綴合しうるかを検討し、実行する場合である。その最も典例とすべきは1936年春の第13次殷墟発掘時に発見されたYH127坑の一万7000餘片（無字甲骨を含む）の範囲内における綴合作業である。いうまでもなく、これはある程度までの綴合が為された上で、董作賓『小屯第二本・殷墟文字乙編』（上中下3冊、1948-53）として刊行されたが、その後、全片にわたる慎重な綴合作業が行われ、改めて張秉権『殷墟文字丙編』（6冊、1957年—72年）として刊行されたのは、周知の通りである。これは、発掘において一括資料として得られたその範囲内においていかに復元綴合が可能かを甲骨の実物に即して綴合作業をおこなった例である。これとは些

か意味を異にするし、その規模もはるかに小さいが、ただ、限定された範囲内での甲骨の実物を取り扱った綴合作業という意味ではかなりこれに似た作業を行った経験が、私自身にもある。これは、決して一括発掘資料ではないが、日本において購得された一千余片の甲骨片が、1945年、アメリカ空軍による東京大空襲によって被災し、焼けただれて極度に碎片化した甲骨がその被災地より回収されたが、これを可能な限りいかにして原様に復さしむるかという意味を持つ作業であった。実はこの過程で、折から私のもとに留学中であつた本書の著者蔡哲茂君はこれに協力してその才能を遺憾なく發揮してくれたのであるが、このことはまた後に述べよう。その成果は松丸道雄編『東京大学東洋文化研究所蔵甲骨文字』圖版編(1983年)として刊行されており、その経緯は、当書の序に詳しい。

その二は、全既刊甲骨著録に見える夥しい拓本のうちから、その拓本のみによって綴合を行おうとするものである。これは、第一にその綴合すべき範囲が先の場合と比較にならぬほど広範であること、第二に甲骨実物に即しての綴合ではないことからくるより大きな困難と、更に場合によつては、その綴合結果に確認がとれないといった困難がつきまとう作業である。甲骨研究史上最初にこのような作業を専ら行つて成果を世に問うた人として、曾毅公氏がある。『甲骨綴存』(1939年)、『甲骨綴合編』(1950年)がいかなる作業過程の結果得られた成果であつたのか、知るよしもないが、おそらく甲骨学にたずさわるものとしてはその成果と、甲骨研究に与える貢献とについて、賛嘆の意を表することを惜しむ者はあるまい。嚴

一萍『甲骨綴合新編』(1975年)、『同補』(1976年序)もまた同様である。私自身は、これとは些か異なり、全甲骨中より、田獵甲骨拓本を選んでその摹本を作成し、まず甲・骨の別、及び五期区分を行った後、研究によって知られた田獵日規定に基づいて干支に基づく整理を行った上で、綴合を試みたことがあった。これは、その方法においては、曾・嚴両氏の作業とは異なり、綴合可能なものはある程度自ずと判明する、という方法に基づくものであったが、その過程で拓本のみによる綴合が、いかに困難を極めるものであるかを実感したものであった。

さて、この度ここに刊行される蔡哲茂『甲骨綴合集』は前述するところに基づいて言うなら、第二のジャンルに属する甲骨綴合作業の成果である。従前の甲骨綴合作業と本書と異なる最大のものは、この間に『甲骨文合集』全13冊、1978—82年が刊行されたことである。言うまでもなく、本書は中国社会科学院歴史研究所が、その総力を挙げて既刊・未刊の甲骨拓本を総集・整理して編集し、中国の威信をかけて刊行した巨冊であり、これを主たる素材にしての綴合作業という、余人のいまだ行ったことのない大事業の成果が本書である。ある意味で作業が些かやりやすくなったという点はあるにせよ、この膨大な範囲における綴合作業が、いかに困難を極めるか、という点では、些かも変わりはないというべきであろう。

前述のように、私が河井荃盧旧蔵骨の復元作業を行った際、折から東京大学に留学した蔡君がこれに参加し、私には発見に至らなかったものについて、極めて多くの綴合を行ってくれた。なぜそのような発

見があるかをはたで見ても極めて不思議な程の感想を持ち、その面での“異能奇才”をこの面において蔡君が持つことを知ったのは極めて大きな驚きであった。余談だが、本書綴合第Ⅱ組については、こんな思ひ出がある。合のⅡは東京大学文学部考古学研究室の蔵品で通纂別二、Ⅱ一、饒・日本所見にそれぞれ表面の写真が収められているが、裏面は発表されていなかった。留学を了えて台湾に帰国して暫く後、蔡君の来信に曰く、「当片は合のⅡと綴合できそうだ。これには裏面にも文字がある。綴合可能であれば、東大の裏面にも文字がある筈なので確認していただけないか」との内容であった。早速調べると蔡君の推測通りであったので、表・裏両面の拓本を作成して送りとどけた。ここでも蔡君の炯眼に脱帽したのである。そして、その能力は今次の書の初稿を見るに及んで改めて実感した。

蔡君一人がよくこの大著を為した壮挙は少なからぬ人士の心胆を寒からしむるものであろう。『甲骨文合集』は近くその補編を刊行する予定と聞く。本書の最大の欠陥たる旧著録番号を明示するとともに、蔡君の努力の結晶たるこの綴合の成果や〈重片表〉〈同文例表〉を吸収して、甲骨学にたずさわる者に便益を与えてくれることを願ってやまない。

自

序

商代的甲骨文是在清光緒末年出土於河南省安陽的小屯村，雖然王懿榮最早從骨董商范維卿等人手中認出此為三代文字，但劉鶚將所得甲骨墨拓刊印《鐵雲藏龜》，世人才知有此商代遺文，而甲骨文的性質也由少數權貴玩好的古董，脫胎換骨成一門新的學問——甲骨學，從此引起國外學者如方法欽、庫壽齡、金璋、明義士、林泰輔等人的注意和蒐求，遂成當代的顯學。

由於甲骨在占卜之前經過攻治的手續，而且反面也要經過鑽鑿焦灼，所以非常容易破碎，羅振玉在《殷虛書契前編序》最早指出「骨甲古脆，文字易滅，今出世逾十年，世人尚未知貴重，不汲汲蒐求，則出土之日，即漸滅之期。」甲骨破碎的原因，陳夢家在《甲骨綴合編》序上有具體的說明。他說：

「甲骨霾藏地下，經三千年之久，既受所載重的地土的傾壓，以至折損腐蝕。于農民掘獲時，又遭鋤鏟的敲擊，而至分裂破碎。既出土後，歷經搬運，亦至易再度斷壞。及到了古玩商手中，又被拆群分售數家，其幸而仍歸于一家收藏者，往往因經攪亂，而不復綴合歸復原狀。所以一家收藏，而著錄于一書者，仍散見于異頁；其一坑所出分在各家者，雖經著錄，而一片已分為數部。為求文例的研究，及窺見卜辭的完整記載，甲骨綴合實為最急切最基本的工作。」

除此之外，墨拓不當也很容易造成甲骨的破損，因此在民國十七年，中央研究院歷史語言研究所大規模發掘小屯殷虛之前，甲骨率為農民犁田所獲或出於盜掘，所以大部

分是碎片，即以目前整理出來的《甲骨文合集》四萬多片中，完整之甲骨亦不過數百片。為避免斷章取義、穿鑿附會，甲骨綴合的工作是甲骨學的重要內容是無庸贅言的。

最早綴合甲骨者，即甲骨四堂之一的王國維，他在一九一七年《戩壽堂所藏殷虛文字考釋》，綴合了《戩》1.10與《後》上8.14兩片，他的理由是「文字體勢大小全同，又二片斷痕合之若合符節。」綴合之後他提出「惟此辭中，報乙在報丙報丁之前，與《史記》報乙報丙在報丁後者不同，殆《史記》誤也。」更正了《殷本紀》報乙至報丁的世次，王氏並自詡為「其可貴蓋在天球河圖上矣」（《甲骨文簡論》引王氏眉批《後編》），後來董作賓於一九三三年在劉體智善齋的藏骨中，又找到了一片與之接合，證明了示癸之下為大乙，又修正了王氏在《戩考》所說的「示癸大丁之間，不數大乙者，大乙為太祖，先公先王或均合食於太祖故也。」的誤解。爾後，郭沫若在《殷契粹編》二3片考釋，綴合了燕20與善齋的兩片甲骨，再次證明了上甲之次為報乙、報丙、報丁、示壬、示癸，從而「又為王說得一佐證矣。」而在有關商代先王的自大乙至祖丁的直系，董作賓在《殷契佚存序》綴合了《佚》256與《甲》2282，即《佚》986。最近裘錫圭先生又加綴了《合》35277，雖然此片可能是習刻，但綴合之後多了「雍己」此一旁系世次，對於雍己和大戊是兄弟輩的舊說提供了佐證。又如許進雄先生綴合了《合》32501與《寧》1.9，此版卜辭祭祀大甲三十牢，中丁二十五牢，羌甲二十七牢，祖辛二十五牢，其甲（河亶甲）三牢，南庚十三牢，祖乙□牢。「羌甲為旁系，但用牲之數僅次於大甲，這對我們理解羌甲特殊之地位，如《丙》395「大示祖乙、祖辛、羌甲害」，把羌甲視為大示，及《粹》250與《屯南》2342把「羌甲」放在父丁（丁）小乙、祖丁、羌甲、祖辛相聯的五示之中，也有所幫助。

甲骨綴合之有益於甲骨學研究，不單是商代先公先王的世系，其他各方面也屢見不鮮。如卜辭中的「它」、「它示」，以往誤以為蠶神，張政烺先生在〈釋它示〉一文中提出修正，以為「卜辭中沒有蠶神」，但張先生誤以為它示即二示，即旁系先王，今由裘錫圭先生綴合的兩版卜辭（見《論集》236頁）它示與二示同見一版，可知它示非二示，再由桂瓊英先生綴合一塊大龜（合672正十合1403）祭祀咸至祖丁九示，各用一牛，而「它」用羊，更可知「它」是不定代詞，即「其它」，「它示」即「其它的神主」（見拙稿〈殷卜辭伊尹顯示考〉）。由於甲骨綴合此一工作是不可能有一天的，具有無限性，而且綴合之後，往往可更正舊說，或有新的意義，故綴合可以說是甲骨的再發掘。

除了上述王國維、董作賓、郭沫若等早期的研究者所作綴合之業績外，外國學者最早注意到綴合的重要性，首推加拿大的明義士，他在〈表較新舊版殷虛書契前編並記所得之新材料〉一文，指出前編新版拓片未加剪齊，「此種改善深利于予，因每欲檢視殘破之處能否吻合，而聯斷片為整體也」。明氏並綴合了二十九版，明氏弟子曾毅公一生便專門從事於甲骨綴合工作，先後出版了《甲骨綴存》及《甲骨綴合編》等書，雖然有不少綴合是錯誤的，但大規模的從事此一工作，早期研究者當以曾毅公為最有貢獻者，此外，甲骨學者們在作某些專題研究時，類聚了大量同事類的卜辭，或多或少都對甲骨綴合作出貢獻，如董作賓的《殷曆譜》，及許進雄先生的《甲骨上鑽鑿形態的研究》，又如最近黃天樹、彭裕商兩位先生所作的甲骨斷代研究的論文，都有不錯的成果。而二十多年前，嚴一萍也曾將各家綴合成果，集成《甲骨綴合新編》及《甲骨綴合新編補》二書。

在曾氏之後，不管是整理甲骨實物或甲骨拓片，綴合都是先前的最重要工作，而描寫其中的甘苦，最為傳神的就是屈萬里先生，他在《甲編考釋》自序上說：

「拼綴工作的甘苦，不是局外人所能想像得到的，每次擺出了幾百片甲骨之後，凝神注目地去尋找它們的『姘頭』。有時聚精會神的地看上幾天，而結果卻一無所獲。但有時卻於無意之，拼合起一版來。『眾裏尋他千百度；驀然回首，那人只在燈火闌珊處。』辛稼軒的詞句，正可以替拼綴甲骨的情景寫照。當在『眾裏尋他』時，那種焦急的心情，不知曾經多少次搔首蹙額；但當忽然拼到一版的時候，那種愉快的心情，又簡直地會使人不知手之舞之足之蹈之了。」

因此屈先生《甲編考釋》所附新綴合甲骨二版，及許進雄先生整理明義士、懷特舊藏甲骨，都有很好的成果，而史語所所公布甲編及乙編一萬多片之後不久，大陸學者曾毅公、郭若愚、李學勤先生等人，即針對此二書，作《殷虛文字綴合》，而張秉權先生用了四十年的工夫，才完成乙編的拼綴，出版了丙編六大本。大陸小屯南地甲骨之出土，肖楠（劉一曼、曹定雲、郭振衆先生）亦拼綴不少甲骨，晚近集大成者當以《甲骨文合集》的印行，桂瓊英先生拼綴了二千版的甲骨最為驚人。

由於《合集》已經分期分類，使得綴合工作更加容易，因此我先後在《大陸雜誌》發表十八次的綴合成果。這時海內外亦有不少新材料公布，如日本除東京大學藏骨外，尚有東洋文庫及天理大學公布，最近亦有中島玉振舊藏甲骨刊行，而英國所藏甲骨及蘇德美日所藏甲骨，在大陸學者與外國學者之協助下陸續刊行，在台北震旦中心的雷煥章神父則出版法國及德瑞荷比所藏甲骨，最近大陸亦有《山東省博物館珍藏甲骨墨拓集》刊印。我也陸續對天理及蘇德美日，及英國及山東省博物館所藏甲骨等書作了

書評介紹。

我個人所發表的甲骨綴合，大部分是用摹本發表，並沒有釋文或考釋，今在此重新用拓影並加摹本、釋文、考釋，其中遙綴的部分（包含實綴中的遙綴），有的是根據正反對貞關係，有的是同一兆序，但由於同文卜辭和成套甲骨很多，所以遙綴的碎片也有可能分屬成套甲骨，或刻有同文卜辭的兩版以上甲骨中的不同版，因此不是絕對可靠，書中附於310組之後，以供參考。定稿之後陸續發現之綴合置於349組之後，列為補遺，又利用兩家之綴合再綴合者，則列為附錄。並附上綴合表及索引等，以便學者方便檢索。又有感於學者們所作綴合有不少是重覆的，如拙稿244組，綴合24233與24236，李學勤先生早在一九五九年的《殷代地理簡論》已綴合，在此本應刪除，但由於《合》24233的反面見於《京》3617及最近刊行的《甲骨續存補編》6.20.2，即《合集》26144，所以在此仍收入拙稿（244組），以誌吾過，其它各家先後發表之同樣綴合，則於考釋中注明，而各家有所加綴或我於各家有所加綴，亦於考釋中注明，並將各家綴合匯集成《甲骨文合集綴合號碼表》，希望此表對研究者能有所幫助。而我在校讀《甲骨文合集》時，發現不少重片以及同文例未放在一起，因此，本書將《甲骨文合集重片號碼表》及《甲骨文合集同文例號碼表》作為附錄，以供使用《甲骨文合集》者之參考。

自

序

蔡哲茂謹序於中央研究院史語所
一九九九年七月十五日